武勇誉出世景清　大経師昔暦
大名なぐさみ曾我　鑓の権三重帷子
心中二枚絵草紙　井筒業平河内通
碁盤太平記　生玉心中寿門松

# 名作歌舞伎全集　一二十八

心中重井筒
心中万年草
心中刄は氷の朔日
長町女腹切

発行
東京創元社

昭和四十八年二月二十日　発行

名作歌舞伎全集
第21巻　近松門左衛門集二

監修者
山本二郎
戸板康二
利倉幸一
河竹登志夫
郡司正勝

発行所
株式会社 東京創元社
代表者 秋山孝男
(162)東京都新宿区新小川町一―十六
電話(〇三)二六八―八二三一
振替東京一五六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

1973 Feb. Printed in Japan © TOKYO-SOGENSHA

# 目次（名作歌舞伎全集第二十一巻　近松門左衛門集二）


武勇誉出世景清（出世景清）……（装置図　八木恵一）……三
大名なぐさみ曾我……（装置図　中島八郎）……六七
心中二枚絵草紙……（装置図　萩原勝美）……九一
碁盤太平記……（装置図　釘町久磨次）……一一
心中重井筒……（装置図　萩原勝美）……一三
心中万年草……（装置図　釘町久磨次）……一五九
心中刃は氷の朔日……（装置図　高根宏浩）……一八一
長町女腹切……（装置図　高根宏浩）……二〇五

大経師昔暦（おさん茂兵衛）……（装置図　高根宏浩）……三三五
生玉心中……（装置図　萩原勝美）……三四五
鑓の権三重帷子……（装置図　八木恵一）……三七一
寿門松（山崎与次兵衛寿の門松）……（装置図　釘町久磨次）……三九七
井筒業平河内通……（装置図　高根宏浩）……三三三

解説・校訂　山本二郎

写真と資料提供―演劇出版社、演劇博物館、大谷図書館
高根宏浩、吉田千秋

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

# 武勇誉出世景清

解説

# 武勇誉出世景清

山本二郎

福地桜痴が改修改題した「武勇誉出世景清」の原作「出世景清」は、貞享三年二月大阪竹本座初演の、近松が初代竹本義太夫のためにはじめて書いた五段の時代浄瑠璃で、時に近松三十四歳。「出世」とかぶせたのは、作者が義太夫の前途を祝したものと考えられている。

本作は幸若舞曲の「景清」や古浄瑠璃の「かげきよ」を直接の粉本にして、そのほか謡曲の「景清」「大仏供養」などを部分的にとりいれているが、従来の古浄瑠璃が説話的だったのを、一歩すすめて劇的なものに高めた、浄瑠璃史上画期的な作である。

あらすじは、(一)平家滅亡ののち、源頼朝をねらう悪七兵衛景清は、熱田大宮司の許に身をよせ、その娘小野姫を妻にめとる。東大寺大仏殿再建の奉行畠山重忠を討とうとするが、見露わされて辛くも落ちのびる。(二)景清は京清水坂に住む妾阿古屋の許に隠れるが、阿古屋は兄十蔵の奸計により嫉妬にかられ景清を密訴、清水参籠中の景清は討手の囲みを破ってまたのがれる。(三)しかし大宮司や小野姫が捕えられ拷問にあっているのを知り、景清は自首して縛につく。(四)阿古屋は子供をつれ、六波羅の土牢につながれている景清に許しを乞うが、景清の怒りがとけぬので、わが子を刺し殺し自害して果てる。景清は嘲弄する十蔵を、牢を破ってふみ殺し、また牢に戻る。(五)景清は首をうたれるが清水観音の身替りで助かる。その霊験に感じた頼朝は、景清を許し、日向の国宮崎の庄を賜わる。景清は請いにまかせ鍬引の物語をし、頼朝に対する怨念を払うため両眼をえぐって日向国へ下る。

この作では、景清を単なる英雄譚から解放して悲劇の主人公に仕立て、阿古屋に人間性を付与するなど、近世の新しい息吹きがうかがえる。また本作は先行曲を巧みに生かして、劇的場面をもりあげることに成功した名作で、後世の数多い景清劇の原型となったということができる。それらの中には、「壇浦兜軍記」(阿古屋の琴責め)、「嬢(むすめ)景清八嶋日記」(娘人丸との別離)、歌舞伎十八番「景清」(牢破り)など、近世演劇の貴重な財産がある。

この作を改修したのがここに収めた桜痴の「武勇誉出世

景清」である。桜痴は「余は近松崇拝の一人である。けれども近松を作劇家としては崇拝せぬ、文章家として尊ぶのである。有りのまゝに評すれば近松は作劇が下手であった」といっているように、近松に関心をもっていくつかの近松作品を改修しているが、改修に当ってはあまり原作に忠実ではない。伊原青々園はそうした桜痴について、ひとりよがりの偏見にとらわれ、またあまりに団十郎の仕勝手に譲歩しているときめつけており、竹の舎主人もまた原作をこわす添削だと非難している。

本作も原作からかなり離れているが、明治二十四年三月歌舞伎座で、九代目団十郎の景清のほか、市川権十郎の重忠、坂東秀調の阿古屋、市川新蔵の三保の谷といった配役で上演された。

この時初日前から口上看板が出て、景清の狂言は市川家では先祖代々つとめているが、この度私（団十郎）がつとめることになり、桜痴先生の添削で、黙阿弥老人其他諸氏の筆を労し五幕に取仕組み云々とあったので、好劇家に大いに期待されたが、その出来栄えについては、当時の劇通の代表的団体だった六二連から「豈計らんや市川家の景清の処は少しもなく、方今流行の活歴好み、是では看板の趣意とは大違ひにて大遺憾で有ったり」と非難された。とはいえ団十郎の演技については、

「軍物語になり八島の戦ひに至り、一門の人々入水の次第を語り、思はず無念むら〳〵と気ざし、懐剣抜いて頼朝に飛び掛かる息込の処は、実に芝居とは思へず、爰は方今俳優中真似ても出来ぬ此丈の伎芸感伏の外なく、面白い事で厶り升た。……トド懐剣にて衣を裂いて恨を晴らし、ハ、、と笑ふ処無類〳〵。夫より両眼をくり抜き、御衣にて顔を包み、頼朝より給はりたる杖にすがり、階を下り出て行く幕切の処は……上手で無くては出来ぬ仕打、恐入升た、感拝〳〵。」

と、手ばなしのほめことばを連ねている。

その後には、明治三十三年七月の歌舞伎座で、染五郎（七代目幸四郎）の景清、猿蔵の重忠、栄三郎（六代目梅幸）の阿古屋、四十三年五月の市村座で、吉右衛門の景清、粂三郎の阿古屋、菊五郎の千葉新助で上演されているが、いずれも東大寺普請小屋を序幕として四幕に縮めてあった。上方では大正八年四月大阪中座で、延若の景清、巌笑の重忠、璃寛の阿古屋によって、五条坂稽古所の場からの三幕物が演じられている。

# 序幕

## 熱田境内夜寒里の場
## 大宮司高康屋形の場

**役名**　悪七兵衛景清。畠山庄司重忠。大宮司高康。浪人藤木小次郎、実は三保ノ谷国俊。梶原平次景高。禰宜、鈴成。巫女、榊葉。同、梛の葉。畠山の臣。梶原の臣。旅人、四人。高康の室、星崎。同娘、人丸。乳人、早瀬。侍女。

本舞台一面の平舞台、ずっと上手三間、本縁付高二重、正面家根の破風を見せ、軒口片流れ、檜皮葺を見せ、この下白壁、長押造り、丸柱、板羽目、本縁より三段の上り口、惣朱塗り末社の社殿横手を見せ、これに続いて並木の根に葉の茂りし杉の立木、下の方奥際に立木の内へ本社そのほかを書き割りし画心の遠見、この前やはり松杉の立木、この間所々に奉納の石燈籠、この外誂え家根の付きし木燈籠十基ばかり建てあり、都て熱田明神境内の体。こゝに新相中の旅人四人、思い〳〵の旅形、菅笠を持ち、捨石へ腰をかけ休み居る。この見得、大拍子にて幕明く。

旅一　何と熱田の神宮といっては、当国の一の宮だけあって中々立派なものじゃ。

旅二　それに平家の盛んの頃は、入道殿の御信仰で年々納まる物も莫大ということ。

旅三　本社の御普請、境内の樹木へまでも手がはいって、塵一つないようだったが、

旅四　源氏の御代になってから前程ではないというが、どうして〳〵一と言って二とは下らぬ。

旅一　イヤ一といえばきょうは一年に一度ある踏歌の神事の初もうで、鳥喰とやらいうお祭の宵宮だという事だ。

旅二　今しがた本社で祝詞が上がり神楽があったが、中々古風なものであった。

旅三　その中へ出た巫女の二人は、白の狩衣緋の袴、すました所がよかったが、

旅四　一人は常の容貌だったが、一人は猫の化けたような変てこらいの面であった。

旅一　あれでは見ている神様も、法楽どころか迷惑で、上がった御神酒の酔いもさめ、

旅二　欠伸をして、

旅四人　ござったろう。

トチャッパの入りし大拍子になり、上手より巫女榊葉、同梛の葉、下髪、薄物の狩衣、緋の袴、草履にて出で来

り、

榊葉　梛の葉さま、嘸おくたびれでござりましょう。早うお内で御休息なされませいなア。

梛葉　イエ／＼私よりあなたこそ、きのうより御神前のお詰め、おくたびれでござんしょう。

榊葉　ところがくたびれませぬ。御神供のあげさげも、日頃中よい禰宜の鈴成さまと御一所ゆえ、どのようにか楽しみで嬉しゅうござりました。

梛葉　オヽそれはお楽しみでござんしたなア。

トこれを旅人聞いて、

旅一　イヤ何ぼ妹背の道は神事だといっても、これは手放しのおのろけ。

旅二　イヤ誰かと思ったら化物だ／＼。

トこれを聞いた巫女、

榊葉　アヽコレ、そこな旅の者、わらわを化物とはテモなめな詞ぞかし。こりゃ聞き捨てにはなりませぬぞ。

旅二　イエこれは粗相を申しました。実は昨夜桑名へ泊まり、くゞつを買って遊んだので、眼が労れておりますから胴から上が真白で下は真赤の緋の袴、

旅三　トント血の池へ落ちた亡者かと存じまして、化物と申しました。

旅四　真平御免、

旅四人　下さいませ。

榊葉　これはけしかる男子かな。神に仕える巫女かんなぎ、穢れ不浄の詞さえ忌むに、けがれし血の池へ落ちた亡者と見違えられては、打ち捨て置かれぬ男子ども、大宮司の庁へ申し立て糺明させねばなりませぬぞ。

旅一　イヤそれは大変だ。

榊葉　さなくばわらわが男子らを、神に願うて命をとるぞ。

旅二　そいつは猶真平だ。

榊葉　おのれ逃ぐるとて逃がそうか。

旅四人　ソレ化物だ、逃げろ／＼。

ト大拍子にて旅人四人は下手へ逃げてはいる。この鳴物をかりて上手より禰宜鈴成、烏帽子、指貫、中啓を持ち出て来り、

鈴成　それにござるは榊葉殿に梛の葉殿、只今お宿へお帰りかな。

榊葉　ほんにあなたは鈴成さま。

梛葉　あなたもお下りでござりまするか。

鈴成　いかにも踏歌の御神事が近寄って参ったゆえ、下稽古のお神楽で中々繁多で困りますが、漸々只今あけ番で帰宿のところでござりまする。

梛葉　鈴成さまと榊さま、お二人お揃いになりましては、

私が居りましてはお邪魔ゆえ、お先へ帰りましょうわいなア。

鈴成　イエ、そう粋を通されては身共甚だ痛み入ります。

梛葉　後程お目もじ致しまする。

ト大拍子にて梛の葉会釈して下手へはいる。後両人残り、

鈴成　イヤこれで邪魔は払いました。

榊葉　シテ梶原さまにはまだお出ではござりませぬか。

鈴成　昨夜御書状なれば、追付けお出でになるでござろうから、これにてお待ち合わせを。

ト向うを見て、

アレ〳〵向うへお出でになるは、

榊葉　ほんに景高さまでござりまする。

ト三味線入り大拍子になり、向うより梶原平次景高、烏帽子、直垂、付太刀、草履持ちの供両人付いて出て来り、直ちに舞台へ来る。これを鈴成榊葉見て、

鈴成　これは〳〵梶原様、お出でにござりましたか。

景高　オ、、誰かと思えば鈴成殿榊葉殿であったか。

鈴成　まず〳〵これへ。

景高　しからばゆるしゃれ。

ト上手捨石へかける。鈴成一礼なし、

鈴成　そこ許様にも御健勝にて、まずは祝着に存じまする。シテ私共へお願いとは、

榊葉　いかなる事にござりまする。

景高　サその頼みと申すは、両人、あたりへ心を、

侍　ハッ。

ト侍両人心を配る。跳えの合方になり、

景高　兼ねてそこ許両人は、父景時が乳母の縁を以て、鎌倉へも参らるゝゆえ洩らし難き秘事なれども、それを明かして頼みというは、此度鎌倉殿南都東大寺御建立につき近々御上洛、しかるに平家の余類悪七兵衛景清、壇の浦より行方知れずと申せど、その実は右幕下をねらい奉らんと致すよし、注進あって慥かにしる。誠に当社の大宮司高康は聟舅の因みあれば、景清めが立ち廻って参るは必定、その折いかなる話を致すか、万一鎌倉殿の御身に付いての事なれば、そこ許の働きを以て逐一に聞き出し、わが旅館まで注進いたしくれられよ。尤もその賞として大宮司にも、追ってはお引き立て下さるようお執り成しいたせば、この儀よろしゅう頼み存ずる。

鈴成　スリャ景清事大宮司方へ参りなば知らせよとのお頼み、ようござりまする。

榊葉　それは何よりお安い事。鈴成様とわたくしがその話を聞き出して、直ぐさま御旅館へ御注進致すでござりましょう。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

景高　スリャ早速の承引、重畳々々。
　ト辺りへ思入れして、
　コレまだこの外に畠山重忠、南都普請奉行として上京の途中、我と同じく忍びにて参りしは不届千万、ついでながら重忠事大宮司方へ参りなば、これもいかなる内談なすや、聞き出してはくれまいか。
鈴成　それは雑作もない事にござりまする。
景高　スリャその儀をも御承知か、それは近頃忝のうござる。しからば本社へ参詣なし武運長久を祈って参ろう。
鈴成　さようなれば景高さま、
景高　旅館で吉左右、相待ち申す。
　ト大拍子になり、景高先に、侍付いて上手へはいる。跡両人残り、
鈴成　イヤ運の向いて来る時はうまい話のあるもの、今のお頼みが首尾よくゆけば、
榊葉　あなたは直ぐに大宮司、わたしはさしづめ、
鈴成　奥榊葉、サヽ同道いたそうか。
　ト鈴成、榊葉、こなしあって下手へ入る。向うより、高康娘人丸、乳人早瀬、ふけたる拵え、侍女○△両人好みの拵えにて附き添い出て来る。花道にて、
早瀬　人丸さまへ申し上げまする。向うが八剣の宮お神楽殿の横手にござりまする。
人丸　オヽそんなら御本社近うへ来ましたかいなア。
侍女○　彼の人がお出でとお約束の所は、八剣様の森の下かげ。
侍女△　まだお見えなさらねば、暫しあれにて御休息、
二人　そんなら皆の者、
早瀬　テモいそ〳〵と。サアお出で、
女三人　遊ばしませいな。
　ト右の鳴物にて舞台へ来る。人丸は上手縁へ腰をかけ、女形三人は下手の捨石へかけ、
早瀬　ほんにこの森蔭は昔より歌の名所、夜寒の里と申しまする所、お二人しっぽり彼のお人と、御寝なるには夜寒の里、
○　ほんにきょうこそお気強く、小次郎様のお心の内、
△　御身の素性もしっかりと、お聞き遊ばしませいナ。
人丸　サアお目もじせぬその先は、お聞き申そうとは思えども、ついその時は跡や先、恥ずかしいのが先立って、
早瀬　ハテマアお気の弱い、
　ト向うを見て、
○　アレ〳〵向うへ、
三人　あのお方が。
　ト時の鐘誂えの両吟の唄になり、向うより藤木小次郎、羽織、着流し、大小、富士形の編笠を冠り出て来り、花

道にて、

小次　神さびていや影高き松杉に、雲見る山は幾世へぬらん。大宮のうしろなる小高き山を、昔より雲見山といいなすよし、刑部小輔雅連が歌にもしるき名所に、つい見惚れては道はかゆかず、思いのほかに手間取りしが、シテ彼の人は参られしか。向うへ参って尋ねて見ん。

ト右の唄にて舞台へ来る。皆々見て、

早瀬　ほんにあなたは藤木様、ようお出で、

三人　遊ばしました。

ト これにて編笠を取り、

小次　オ、人丸殿を始めとして、約束違えずようお出で下されしな。

早瀬　サアその御挨拶は後になされまして、まアこれへおかけ遊ばしませ。

小次　しからば御免下さりませ。

ト小次郎、同じく縁へ腰をかけ、

今日此所にてお出逢い申すは、何か余儀なきお話あってとのお手紙、シテそのお話と申すはいかなる儀でござるな。

人丸　サアそのお話は、人目あっては。

トこれを聞き早瀬前へ出て、

早瀬　オ、それ〳〵、お二人さん、わたしはこれから御本社をはじめとして、御末社の神々様へ御拝礼をいたしまするれば、あなた方は先へ帰り、人丸さまはこの早瀬がしっかりとお守りをいたしておりまするれば、御安心なさるよう奥様へ申し上げて下さりませ。

○　そんなら私たち両人は、

△　お先へ帰るといたしましょう。

早瀬　それが宜しゅうございまする。モシお嬢様、その後でごゆっくりと、ナ、宜しゅうございまするか。

ト人丸へよろしく思入れ。

さようなれば藤木様。

小次　スリャモウお出ででござるかな。

早瀬　後程お目もじ、

三人　致しましょうわいナ。

ト早瀬、侍女二人付いて下手へはいる。小次郎あたりへ思入れして、

小次　はやたそがれ近けれど、こゝはまだ往来しげくよその見る目も憚りあれば、この社の横手なる夜寒の里の下かげにて、何かのお話承らん。

人丸　さようなれば小次郎様。

小次　人丸殿、イザ御同道致すでござろう。

トこの模様よろしく、両人上手へ歩きながらこの道具廻る。

本舞台やはり一面の平舞台、上の方ずっと奥深に、檜皮葺の家根より朱塗の社の横手を見せたる張物、この前松杉の立木、社につゞいて下手へかけ、画心に森の内に本社その外を見せたる書割の中遠見、真中より少し下手に誂え奉納の石燈籠二台建てあり、この前松杉葉の茂りし立木、この内に誂え家根付丹塗の木燈籠四、五本立てあり、上下植込みの見切、すべて熱田境内夜寒の里の体。大拍子にてこの道具とまる。

ト直ぐに上手より以前の小次郎、人丸出て来り、あたりの捨石へかけ、

小次　シテ身共へ話とは、いかなる事でござるかな。

人丸　そのお話と申しまするは、わたくしはあなたのお心がお恨めしゅうござりまする。

小次　なに、我が心が恨めしいとは。

ト誂えの合方になり、

人丸　あなたと嬉しい縁を結びましたは、去年の睦月萱津村の神事の時、乳母に連れられ玉井の里に参りし折に編笠越し、初めてお顔をかいま見て、藤木様とおっしゃる事、聞いて嬉しきお情に、たとい父母のゆるしなき、妹背なりとも一生に、一人の夫はあなたぞと、誠の父のその名まで、お明かし申しましたるに、あなたは藤木小次郎と、おっしゃったばっかりで、氏も素性もお隠し遊ばす、そのお心がお恨めしく、それ言いたさにお待ち申しておりましたわいなア。

小次　何事のお尋ねかと心を苦しめ居ったるに、わが実名を今以て包みかくすと恨みの数々、実に尤もの事ながら、御身が父は大宮司高康殿にあらざる由、承って心の転動、よしなき人に恋せずば、かゝる悔みのあらざるに、知らぬ事とて敵のゆかり、それゆえ本名告げざりしぞ。

人丸　エ、、何とおっしゃりまする。わたくしの実の父はあなたには敵じゃとおっしゃりまするか。

ト言うは偽りであろうという思入れあって、

イエ〳〵それは皆偽り、今更わたくしがおいやになり、縁を断とうと思し召す、お心ゆえにそのような、

小次　イヤ〳〵、決して偽りならず。あからさまに申しなば直ぐにも切らねばならざる身の上。

人丸　イエ〳〵それはお偽り。

小次　何偽りを申そうぞ。

人丸　それでなければ御本名、お明かしなされて下さりませ。

トこれにて小次郎じっと思入れあって、

小次　是非に及ばぬ。某が実名身の上あかしお聞かせ申さん。

ト誂えの合方になり、

某はもと院の別当藤原の左馬頭が一子左馬五郎と申すもの。初冠のその頃より、公家に似合わぬ荒気の振舞い、思わぬ喧嘩の腕立てに、父の勘気を蒙りて諸国をさまよう折柄に、源平の合戦始まり、幸いなりと三保ノ谷四郎と仮名なし、判官殿の手に属し度々の出陣、何とぞ致し功名手柄を顕わして、父頭の殿の名をも揚げ帰参のよすがにせんものと、待ちに待ったる屋島の磯、晴れの勝負の相手こそ、平家に名高き悪七兵衛景清と一騎打ちの戦いに、彼は長刀我は太刀、打ち合う中に鍔元より、ほっきと折れて力なく、味方の陣に引き退くその時、景清うしろより兜の鍬を引っつかみ、引き倒さんとエイと引く、そうはさせじと我もまた、力を籠めて踏みこたえ、互いに劣らぬ強力に、兜の鍬は鉢付より、フッツと切れて物別れ、この争いに我が鍬景清の手に残りしを、畠山重忠殿のみは、決して三保ノ谷が不覚にあらず、功名なりとは称美ありしかど、源氏の兵一同の物笑いとなったれば、余儀なくその場より軍中を退き、景清に再び巡り合い互いに勝負を決せんと、藤木小次郎と仮名して、諸国遍歴なすうちに、思わずも御身にかたらい、承れば大宮司は祖父にして、実の父は景清と聞いて、よしなき仇枕結びしものと後悔したり。只この上は御身と縁を切って景清を討ち取るか、さなくばこの身の恥辱を忍び、御身と夫婦に相なるか、二ツに一ツの決心は、孝と情の二筋道、それゆえにこそ姓名を今まで隠せしぞ。

ト これを聞く人丸思入れあって、

人丸　スリャ言い交わしたる小次郎様は、三保ノ谷殿でござりましたか。そういう事とは露知らず、仇し縁を結びしは、これも宿世の因縁か。とはいえ父の景清様には、幼きその時にお別れ申して十年あまり、どこにお忍びなさるゝか、明暮恋しく思いしに、思う殿御の敵とは、思えば悲しやなア。

ト愁いのこなし。

小次　この上は外に道なし、妹背の縁を立ち切りて、あかの他人と相ならば、互いの義理は立つ道理。

人丸　そりゃ三保ノ谷様には、

小次　ものゝふの身の切なさを、推量あれや人丸どの。

ト このうち人丸は懐剣を手早く出し、

人丸　そうじゃ。

ト 自害しようとするを止め、

小次　コリャ何ゆえの生害なるぞ。

人丸　エ、何ゆえとはお情ない。あなたは殿御の御心強

く、縁を切ろうとおっしゃれど、わたしゃどうもこの儘に、お別れ申す事ならねば、いっそこの場で自害なし、未来の御縁をあの世から、お待ち申しております。

小次　そりゃそれ程に某を。

人丸　サ、放して、殺して下さりませ。

ト又死のうとする。小次郎是非なきこなしにて、

小次　せくに及ばぬ人丸殿、刃をとゞめられよ。御身が切なる孝心貞節、見殺しになるべきや。我さえなくば御身の父、景清殿を敵と狙う者もなし、三保ノ谷四郎は物に狂いしかと、笑わば笑え誹らば誹れ。どうで開けぬ拙き武運、御身と共にこの場にて。

人丸　さようなればわたくしと共々に。

小次　生害なして、未来は一蓮托生なるぞ。

人丸　エ、お嬉しゅうござりまする。

ト あたりへ思入れして、

小次　乳人や腰元の参らぬうち、少しも早く用意せよ。

ト人丸、小次郎の顔を見て愁いのこなし。

小次　ア、思えばはかない、

小次　身の上じゃなア。

人丸

ト本釣鐘を打ち込み、小次郎は脇差、人丸は懐剣にて、両人死のうとする。この以前より下手立木の蔭へ悪七兵衛景清、熊谷笠、誂えの羽織、野袴、大小、浪人の拵えにて出て様子を伺い、トゞこの時ツカ〳〵と前へ出て、双方の手を押え、

景清　その生害暫く待たれよ。

ト留める。両人惚りのこなし。

小次　アイヤお止め下さるな。

景清　生は難く死は易し。ハテさて待たれいと申すに。

トキッと押え、あたりへ思入れあって、

あたりに折よく人目なし。

ト両人を上下へ分け、真中へはいり、捨石へ腰をかけ、最前よりのこの場の様子承れば、そこ許には源家の勇士三保ノ谷殿、まった女性は平家の残党にて、鎌倉殿を付け狙うと詮議きびしき景清が娘とは。互いに義理と情に迫り心弱くも生害とは、健気には似たれどもコレ女性、実の父が命を助けんとおのれも死に、又夫と頼みたる三保ノ谷殿まで生害させしと、景清殿が聞かれなば、よも喜びは致されまい。また三保ノ谷とも言わるゝ勇士が、女の義理にさし迫り、無益に一命捨てんとは、不覚千万でござろうぞ。

小次　何と言わるゝ。

ト合方きっぱりとなり、

景清　御身屋島の戦いに景清が為に批判をうけ、景清が行衛尋ねらるゝ事、再度の出会いに勝負を決し、不覚をす

すがん為ならずや。たとい景清天を翔り地を穿って隠るるとも、かれも人間にして鬼神ならねば知れざる事はよもあらじ。出逢うその場が二度の戦場、景清が首かき切って不覚の汚名を雪がんとは、なぜ決心は致されぬ。又御身とてもその通り、祖父大宮司殿がいつくしみ、雲見の山よりいや高く鳴海の海より深からん。その恩をも報いずして生害あらば不孝の罪はいかばかり、殊に女は善悪とも夫に付くが婦人の道、たとえ景清実の父なりとも、夫と思う三保ノ谷殿に、力を添えなば貞女の誠、さもなくては武士の娘なりとは申されまい。只何事もながらえて、

ト少し考えて、

松風の里に群がる真鶴は、八千歳重ぬる心地こそすれ。死するは思いとゞまり給え。

ト笠の内よりよろしく意見の思入れ、これにて小次郎も思入れあって、

小次　御親切なるその御意見、一々胸にこたえて今更面目次第もござらぬ。

人丸　父にまさりし祖父さまの、御恩も送らでお歎きを、かけるは不孝を重ぬる道理。

小次　熱田の大明神も照覧あれ、生害思い止まるでござろう。

景清　スリャ思い止まり召さるゝとな。それで某も安堵いたした。

小次　シテ和殿の御姓名は。

景清　御免下され、改めてお名のり申す時節もござろう。

トこゝへ以前の乳人、腰元下手より出て、

早瀬　お姫さま、大きに遅うなりまして、

○　最早たそがれ、

△　お館へ。

人丸　オ、皆の者、それでは館へ。

早瀬　藤木様にも御一緒に。

ト袖を控えるを、

小次　アイヤ拙者は用事もござれば又の逢瀬を。

人丸　そんならあなたは。

ト小次郎の袖をとる。小次郎、人丸の手をとって引きよせ、これが別れという思入れ、双方よろしくあって気をかえ、

小次　これにてお別れ申すでござろう。

ト唄になり、小次郎、景清へ一礼して下手へ、人丸は乳人侍女付いて上手へ、景清は始終あたりへ思入れして後ろへ下がって居る。トゞ人丸小次郎は上下へはいる。後景清上下を見送りホッと思入れ、時の鐘、跳えの合方になり、上手より重忠、烏帽子、直垂、付太刀、編笠、忍



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co